

検疫上注目される病虫害の解説

糸状菌病の一種

学名：*Phytophthora ramorum*

英名：sudden oak death, ramorum leaf blight

本菌は、1993 年、ドイツ及びオランダにおいてツツジ属、ガマズミ属植物から、また 1995 年に米国加州沿岸部の森林地帯のブナ科植物で発生が確認された日本未発生の病原菌である。植物防疫法施行規則において、宿主植物を対象とした輸出国での栽培地検査及び宿主植物から生産された植込み資材を対象とした輸出前消毒（71℃以上で 75 分以上又はこれと同等以上の熱処理）の対象としている。宿主は主に木本植物であり、広範な種におよぶ。伝搬は、病斑上に生じた遊走子のう、厚壁孢子が風雨により飛散して行われる。罹病苗の移動、植込み資材、灌水なども重要な伝搬経路となる。

分布地域：ヨーロッパ及び北アメリカ

宿主植物：主要な宿主は、アセビ属、コナラ属、シイ属、ツツジ属、ツバキ属、マテバシイ属、ブナ属等

病徴：宿主植物の種類によって病徴が異なり、①コナラ属、タンオーク（*Lithocarpus densiflorus*）等：枝または幹のかいよう症状、枯死 ②その他のブナ科：枝先の褐変、枯死 ③ツツジ属等：葉の褐変、枯死に大別される。経済的被害は①が最も大きいとされる（図 1）。

病原菌の形態：無性世代：楕円形～長楕円形、脱落性、やや顕著な乳頭突起を有する遊走子のう（図 2）及び厚壁孢子等を形成する。有性世代：雌雄異株性。円形～樽形の造精子器、円形の造卵器及び円形、充満性の卵孢子を形成する。

識別：形態観察及び種特異的プライマーを用いた遺伝子診断により識別が可能である。

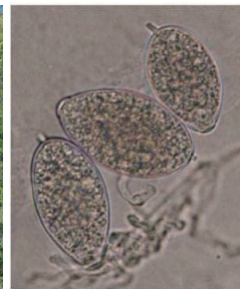
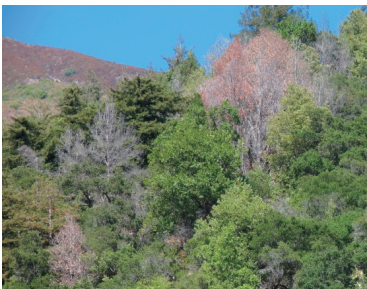


図 1 タンオークの病徴。白く見えるのが本菌により枯死した樹木（FORESTRY IMAGES から許可を得て掲載）

図 2 遊走子のう

ミカンキイロアザミウマ

学名：*Frankliniella occidentalis* (Pergande)

英名：western flower thrips

本種は北米原産で、1990 年に日本への侵入が確認され、現在では多くの地域に分布を拡大している害虫である。多食性で繁殖力が高い上、植物ウイルスのベクターとなる。特に台湾は本種の侵入を警戒しており、寄主植物（シソ、ナス、モモ、小菊等）を輸出する際には綿密な検査を必要とし、本種が付着していないか、あるいは適切な検疫処理を行ったことを植物検疫証明書に追記する必要がある。

分布地域：日本、シンガポール、オーストラリア、ヨーロッパ、アフリカ、南北アメリカ等

寄主植物：キク、バラ、イチゴ、トマト、ブドウ等の各種花卉・野菜・果樹

形態：雌成虫（図 1）の体長は 1.4 ～ 1.7mm。長翅型で体色は黄色から暗褐色のものまで変異に富むが、夏季は淡色、冬季は暗色のものが多い。複眼後方に長刺毛を有する（図 2 矢印）ことで同属のカホンカハナアザミウマやヒラズハナアザミウマと容易に識別することができる。

防除：各種薬剤が使用できるが、薬剤抵抗性が発現しやすいの

で、発生源となる雑草の除去、被覆資材の使用といった耕種的防除を組み合わせることが望ましい。また、ピーマンとイチゴでは生物農薬（スワルスキーカブリダニ等）の使用も可能である。



図 1 雌成虫

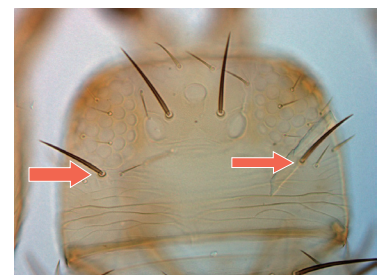


図 2 雌成虫の頭部